



長崎大学学報

第664号

幕末・明治期 日本古写真コレクション



日本レトロフォーカス(22) - 長崎・聖福寺 -

1

平成17年

表紙写真説明

日本レトロフォーカス⁽²²⁾ - 長崎・聖福寺 -

長崎大学附属図書館所蔵

写真 [59 - 3 - 2]

サイズ：縦20.5cm × 横26.4cm

モノクロに彩色

長崎の唐寺の四ヶ寺のひとつ萬壽山^{まんじゅざん}聖福寺^{しょうふくじ}（長崎市玉園町3 - 7）の本堂である。興福寺（三江系，俗に南京寺）・福濟寺（泉南系，漳州寺）・崇福寺（福建系，福州寺）はそれぞれ渡来中国人の出身地の菩提寺とするが，これにたいして聖福寺は広東寺^{かんとうてら}とよばれた。

写真ではかすれているが上階軒の正面に「大雄寶殿」，正殿には「海國人天」の扁額が掲げられている。

正殿の柱は，向かって右に「五雲嶺上伝楞伽心印」^{りょうか}（五雲嶺上に楞伽心印を伝へ），左には「萬壽山中圓毘盧法身」^{びるまどか}（萬壽山中毘盧法身を圓にす）の對聯がかけられている。

屋根は入母屋造りで，なんともいえないくらい美しく反っている。原田多加司著『屋根の日本史』（中公新書，2004）によれば，「^{むく}起り屋根」に類する。屋根の中央に宝珠，両端に鯨尾が見える。石段の上には住職と侍僧が写っている。およそ明治中期の撮影とすれば，十一代の方中真箭（村山氏）あるいは十二代確志真石（三浦氏）あたりではなかろうか。撮影者も年代も未詳である。

中央の両扉には桃の実が浮き彫りで描かれている。長崎の老舗では，三月三日上巳に「桃カステラ」を売り出すが，雛の節供にふさわしい美しい菓子である。

桃の実は，むかし『詩經』周南「桃夭」に歌われたように若い命が充ち満ちたシンボルとして，老いては「西王母」の不老長寿の仙果として，さらには陶淵明の「桃花源記」は理想郷へのみちすじとして慕われてきた。中国召南地方を原産とする桃の伝承が，やがて古代の日本へ伝わり，『古事記』や『日本書紀』の桃の実の威力をあらわす神話にとりいれられ，あるいは桃から生まれた「桃太郎」の鬼退治伝説などを生みだしたものであろう。

聖福寺は延宝5年（1677），京都宇治の黄檗山万福寺の末寺として開創された。開基は鉄心道胖^{てっしんどうはん}（1641 - 1710）である。道胖の父は陳氏，母は日本人で西村氏，寛文元年（1661）14歳のとき木庵禅師に師事し，木庵にしたがって宇治の万福寺に上がって修行した。宝永2年（1705）には江戸白金台の瑞聖寺の住職を4年つとめ，再び長崎の聖福寺に帰り住持した。後山に墓碑がある。宝永7年10月3日没，70歳。

なおここは「聖福八景」として多くの文人が詩に詠んでいる。伽藍は自然の森につつまれ，静かに当時のたたずまいをのこしている。長崎随一の景観の地である。大雄宝殿の他天王殿，山門などが県の文化財に指定されている。

【撮影者未詳】

一枚物写真。

長 崎 大 学 学 報

平成17年 1 月 1 日 第664号

編集発行

長崎大学総務部総務課

〒852-8521 長崎市文教町 1 番14号

☎ (095) 819 - 2014

